

2024年5月26日三位一体主日・聖霊降臨後第1主日説教

出エジプト記3章1-6節

ローマの信徒への手紙8章12-17節

ヨハネ福音書3章1-16節

本日は、三位一体主日、また聖霊降臨後第1主日です。来週から聖霊降臨後第〇〇主日と表記されます。先週、聖霊降臨を祝いましたので、聖霊の働きを強く感じることは大切です。しかし、教会にとってもわたしたち一人ひとりにとっても、三位一体について考えることの重要さは、変わりません。

さて、その三位一体という事柄ですが、『聖書』には直接記されていません。マタイ福音書には、「父と子と聖霊の名によって洗礼を受け」（マタイ 28：19）という表現はありますが、三位一体という概念は、『聖書』全体が暗示する事柄といえます。そして、三位一体について比較的明確に暗示している文書の一つが、ヨハネ福音書です。本日の箇所もその一つです。

本日の箇所は、ニコデモとイエス様との出会いの物語です。最初に、「さて、ファリサイ派の一人で、ニコデモと言う人がいた。ユダヤ人たちの指導者であった」（ヨハネ3：1）とあり、ニコデモは、ファリサイ派であり、指導者であったと説明されています。新共同訳で「議員」と訳されていました。途中では、「イスラエルの教師」とも表現されています。ニコデモは、宗教的社会的な意味で、イスラエルの指導者的立場にいた人でした。

そのような立場のためでしょうか、「夜イエスのもとに来て言った。『先生、私どもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、誰も行うことはできないからです。』（ヨハネ3：2）とあります。夜ですから、おそらく密かに、ニコデモは、イエス様に質問に来たのでした。しかし、イエス様は、ニコデモが語る前に、その心の中のことを知っていました。それゆえ唐突に「よくよく言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：3）と話しかけます。イエス様がこのように出会う前に、その人のことを知っているというお話は、すでにナタナエルの場面でありました（ヨハネ1：43-51）。ニコデモの疑問には、様々なものがあつたかも知れません。しかし、ニコデモの関心には「神の国」という事柄があつたことは確かだったのでしょう。それゆえ会話はそのまま進んでいきます。ただし、ニコデモは、「新しく生まれる」ということを理解できませんでした。イエス様の言葉にある「見る」という動作には、「理解する、体験する」などの意味もあるからかもしれません。それゆえ、「年を取った者が、どうして生まれることができましょう。もう一度、母の胎に入って生まれることができるのでしょうか」（ヨハネ3：4）と答えます。常識的に考えて正しい答えです。それに対してイエス様は、「よくよく言っておく。誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれなければならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」（ヨ

ハネ3:5-8)と説明を深めます。イエス様は、人間的な範囲の中で考えるのではなく、霊から生まれるものとして、神の霊のことを問題にしました。イエス様が示す神の国は、霊的な存在であり、この世界に物理的に存在する事柄ではないからです。しかし、ニコデモはここでも「**どうして、そんなことがありますでしょうか**」(ヨハネ3:9)と語ります。ニコデモは、イエス様を神から来た存在と分かっていましたが、終始人間の理解の範囲で認識したので、イエス様の言葉を理解できなかったのです。

この物語には、言葉の行き違いがあります。その行き違いの根底にあるのは、「言葉」と「霊」との関係です。『聖書』において、「言葉」も「霊」も大切ですが、神の言葉と神の霊は働きが違います。言葉は本質を明確にし、霊は人を動かすのです。使徒たちに起こった聖霊降臨の出来事も霊の働きの一つです。モーセの出来事で今何が起きているのかを明確に示したのは、主なる神様の「言葉」でした。しかし、モーセをそのような状況へと導き、召命の出来事を引き起こしたのは、本日の箇所では明示されていませんが、主なる神様の霊です。ニコデモは、言葉だけでイエス様の教えを理解しようとしたので、言葉を超えて、人を救いへと導く、霊的な部分を理解することができなかったのです。

ヨハネ福音書は、「はじめに言葉があった」と有名な言葉で始まりますが、言葉だけが強調される福音書ではありません。「神の霊」の働きが、全てイエス様に集中します。神様の霊の働きが、イエスの十字架と復活に集中しているのです。だから三位一体を暗示するのです。そして、その集中点が、何が救いの本質であるかを示してくださるのです。これは、それを理解するか否か、という問題ではなく、その集中点を示してくださったイエス様を信じるか信じないかという、信仰の問題なのです。そして、その信仰の目的は、信じる者が永遠の命を得ることです。信仰もその目的も神の愛から与えられるのです。だからこそ、十字架の出来事後、「**それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである**」(ヨハネ3:15)と本日の物語は結ばれているのです。また聖書日課では、「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**」(ヨハネ3:16)と次に続く『聖書』でも有名な箇所を含めているのです。

本日は、三位一体主日ですが、三位一体について深く検討することをしませんでした。なぜならば、それは説明されて理解する事柄ではなく、受け入れるべき事柄であるからです。なぜならば、人間の思いを超えて、すべての人、世界のすべてを大切にされる主なる神様の愛、それがイエス様を通して過去に示され、今も、またこれからも注がれ続けることを、一言で表現しようとするならば、三位一体という表現になるからです。

この世界に生きているわたしたちは、この世界に生きているからこそ、多くの疑問や迷い、悩み不安があります。それらがこの世界の中で解決することを望むことも大切です。しかし、まことの希望は、この世界にはありません。イエス様を通して与えられる信仰の世界にあります。それは、イエス様がわたしたちに与えてくださる永遠のいのちです。その永遠のいのちを希望としてこれからも、この世界で歩みたいと思います。